

福島原発災害後浪江町からいわき市に避難した人々の動向

Trends of People Evacuated from Namie Town to Iwaki City after the Fukushima Nuclear Disaster

水田 恵三¹
Keizo MIZUTA

¹ 尚絅学院大学 総合人間科学部

Shoukei Gakuin University, Faculty of Comprehensive Human Sciences

After the 2011 Fukushima nuclear disaster, 14,000 of the 20,000 residents evacuated to Fukushima prefecture. 20% of them are said to have finally evacuated to Iwaki city. At the beginning of the evacuation, it seems that there was a backlash from Iwaki citizens, but many people have built new houses in Iwaki city after that. Here, based on the questionnaire survey conducted in 2019. Through comparison with people returning to Namie Town, we will show the results of their thoughts on their current feelings and future trends.

Keywords : Fukushima nuclear disaster, Namie town, Iwaki City

1. はじめに

2011年に生じた福島原発災害は、その後全国に避難した人が徐々に福島県内に戻ってきた。いわき市は、浪江町とは同じ福島県内の湾岸部ということもあり気候風土が似ており、多く浪江町から避難した。また、同じく多く避難し、移転先に仮町役場があった二本松市と比べても住民はその地で安定していると言われ、もう浪江町には帰ってこないであろうと言われる。2015年の時点で、福島県内に戻った、浪江町民のうち、2割がいわき市に避難した(日本赤十字看護大学 2017)。いわき市には浪江町からの仮設住宅が建設されなかった関係もあって、人々は借り上げ住宅を借りたり、親戚を頼ったりした。避難当初は、原発災害前からいわき市に住んでいる住民との軋轢があり、家を新築したとしても、受け入れられないこともあった。その中で「なみえ絆いわき会」を創設し、住民ひとり一人に悩みを聞いて回った活動の意義は大きい。浪江町の場合は、福島県内に避難した人のうち、いわき市や郡山市に避難した人は2017年に避難区域が解除になったその後も、避難先に住居を構え、浪江町に帰還する人が少ない(2020年現在)。

本研究では、2019年主に福島県在住者を対象に行った

アンケート調査で、いわき市に在住している人々の動向を全体との比較を中心に考察した。

2. 方法

アンケートは、2019年4月から9月にかけて、浪江町から主に福島県内に避難している人々500名を対象として実施し、元のお住まいや地域の様子、元の地域への帰属感、現在のお住まいや、現在の地域への帰属感、満足度、今後の動向などを尋ねた。アンケートは手渡しやポスティングで行い、返送は郵送で行った。

3. 結果

500名配布したアンケートのうち242名の回答を得た(48.2%)。全体の結果の概略は以下である。

今回の調査では、津島など帰還困難区域の人も回答頂いた。原発事故時のお住まいは、自宅が圧倒的に多かった。浪江には先祖代々100年から200年住んでいらっしゃる、50年以上お住まいの人が多く、震災前の浪江の暮らしや人々への思いが強い人が多い。その一方で避難先の地域への愛着は以前ほどではない。今回回答してくださった方の現住所は浪江町、いわき市、二本松市、南相馬

市が多かった。現在周囲に助けてくれる人がいるかという間には8割以上の方がいると答えたが、14%はいないと答えていた。健康状態はおおむねよい、ややよいであったが、悪い、非常に悪いも15%いた。

生きがいを感じる時は 家族との団らん、趣味やスポーツ、おいしいものを食べているときなどで 浪江の人々と集まっているときもあった。現在の生活に対する満足はおおむねやや満足であったが、自身の健康はやや不満によっていた。原発災害後、浪江にある家を見に行った方は8割近くおり、先祖の墓にも時々行っている、浪江での行事には行かない人も4分の1ほどいる一方で、広報なみえは必ず見る人が大半であった。また、浪江で親しかった人には4分の3が連絡を取っていたが、取らない人も4分の1いた。住民票は移すつもりがない人、迷っている人が多い。今後は浪江に戻らないと表明している人は少ないが 元の暮らしや将来には悲観的な人が多い。

(1)現在の住居形態(表1)

今回242名のうち102名(42.1%)がいわき市在住であった。帰還困難地域の人も含まれている。住居形態は自己所有(主に住宅を再建)が最も多い。(83.3%)これは、自己所有の自宅を再建した、もしくは購入したことを意味している。60年以上住んでいた方が多い。

表1 現在の住居形態

1 自己所有	85
2 復興公営住宅	11
3 民間賃貸	4
4 実家、親戚、知人	0

(2)浪江町にはいつ頃から住んでいたか(図1)

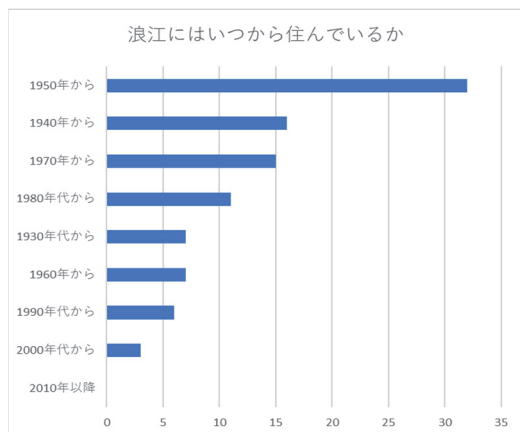


図1 浪江町居住開始時期

(3)原発災害前の浪江への思い

皆で助け合っって仲が良かったなど質問項目は8項目であり、その一部を以下に示す。

- A. 住んでいた地域の行事によく参加していたと思う
 - 1. そう思う 2. 少しそう思う 3. あまり思わない 4. そう思わない
 - B. 住んでいた地域のためになることをして、役にたちたいと思っていた
 - C. 住んでいた地域の人たちは皆仲が良かったと思う
 - D. 住んでいた地域は居心地が良くして落ち着くことができたと思う
 - E. 住んでいた地域の人たちは皆気があっていたと思う
- 4件法は 1 そう思うと 肯定的な順番に並べている。これは嫌な気持ちにさせないためである。

その結果、平均は1.42とそう思うに近い。これは元の浪江への強い思いが感じられる。

(4)現在の生きがい(表2)

家族との団らんも多いが、浪江の人との集まりも非常に大切にしている。

表2 現在の生きがい

生きがい	選択回数
1 家族との団らん	151
2 浪江の人と集まっているとき	113
4 趣味やスポーツに熱中しているとき	110
8 おいしいものを食べているとき	99
6 旅行に行っているとき	86
5 テレビやラジオ ネットなどを見たり聞いたりしているとき	79
7 仕事に打ち込んでいるとき	59
10 よい作品(作物)が出来たとき	48
3 現在の地域の人と集まっているとき	43
9 社会奉仕や地域活動をしているとき	42
11 若者と交流しているとき	23

(5)現在の生活の満足度

- ① 毎日の暮らしに
- ② ご自身の健康に
- ③ 現在の人間関係に
- ④ 現在の家庭生活に
- ⑤ ご自分の仕事に

に対して1が満足 2がやや満足 3やや不満 4不満

2. 23の満足度に関しては浪江に戻っている方(2.17)

よりはやや不満よりである。一方健康に関しては2.11で浪江に戻っている人(2.59)よりやや満足よりである。身体面では落ち着いているが、精神的にはまだ落ち着いていないというのは言い過ぎであろうか。

(6)現在の地域への満足度

これは、先の浪江町への思いと同じ質問項目で尋ねた。その結果2.46であった。これはあまりそう思わないに偏っており、元の浪江の町への満足度が1.42であるから、それに比べると、現在の地域への満足度は低いと結論づけても言い過ぎではない。

(7)浪江(町)との交流(表3)

浪江の元の家にはほとんど行っていない方が多く、浪江の墓には時々行っている、浪江の行事にはまちまち、浪江の方たちとの交流はほとんどとっていない方が21名いる。アンケート全体の結果を以下に示す。

表3 浪江(町)との交流状況

	浪江の家	浪江の墓	浪江の行事	広報なみえ	浪江の人との交流
1 頻繁	15	21	25	75	15
2 時々	12	65	32	18	60
3 ほとんどとっていない	67	7	29	5	21
4 まったく	2	3	11	0	2

a) 浪江の家(全体)

いわき市の場合、全体と比較するとほとんど見に行っていない人が多い(表4)。

表4 浪江の家

浪江の家	
頻繁に行った	45
時々行った	139
ほとんど見に行っていない	27
全く見に行っていない	4
該当しない	5

b) 浪江の墓(全体)(表5)

表5 先祖の墓

先祖の墓	
頻繁に行っている	47
時々行っている	146
ほとんど行っていない	13
全く行っていない	5
該当しない	12

c) 浪江の行事(全体)(表6)

表6 浪江の行事

浪江の行事	人数
頻繁に行っている	68
時々行っている	84
ほとんど行っていない	51
全く行っていない	18

d) 浪江の人との交流(全体)

全体と比較すると、確かに浪江に関する行事への参加や人々との交流は少ないが、交流を継続している人も半数以上を占めている(表7)。

表7 浪江の人との交流

浪江の人との連絡	
頻繁にとっている	37
時々とっている	130
ほとんど取っていない	40
全く取っていない	13

e) 住民票に関して

移すつもりはない、すでに移した、迷っているが3割ずつである(表8)。

表8 住民票に関して

1 移すつもりはない	36
2 自分たちだけ移す	21
3 自分たちが移さないが子どもたちは移す	3
4 すでに全員移した	3
5 どうしようか迷っている	33
6 すでに浪江に戻っている	0

f) 元の浪江の家

すでに解体した家が多い。これは、長期間、放置されていた家を、行政の支援を得て解体したものである。仮に浪江に戻ろうとしても、すでに家がないことは大きな支障になる(表9)。

表9 元の浪江の家の状況

0 該当しない(持ち家はない)	8
1 リフォームして住むつもり	12
2 そのままにしている	14
3 いずれ解体する	12
4 すでに解体した	42
5 家土地共に売却	1

g) 今後のこと(表 10)

すでに戻っているの 2 件は、いわき市にも家があり、浪江にも家がある人であり、両方の家を行き来している。戻らないことを決意した人が多い。その一方でいずれ戻る、自分たちは戻る、を合わせると 12 名、迷っている人も 19 名いて、イメージとして、いわきに家を建てた人はもう浪江に戻らないというイメージとは異なっている。

表 10 今後の意向

	人数
1 すでに戻っている	2
2 元の家ではないが戻っている	0
3 いずれもどるつもりだ	8
4 自分たちは戻るが子どもはもどらない	4
5 自分たちは戻らないが子どもたちには戻って欲しい	0
6 迷っている	19
7 福島県内には戻る	5
8 こころは浪江にある	8
9 浪江町には戻らない	25

h) 戻らない理由(表 11)

帰還困難に地域の人を除いて、生活が不便だから、人が帰っていないからという理由がある。線量が下がっていないという理由が少ないのは世間のイメージとは異なっている。

表 11 戻らない理由

1 帰還困難	14
2 仕事に就いている	8
3 子どもを転校させたくない	7
4 人が帰っていないから	11
5 生活が不便だから	21
6 住宅が住めない	14
7 線量が下がってない	3
8 フレコンパックがある	1
9 廃炉が終了していない	9
10 環境を変えたくない	8

4. 考察

2019 年 4 月から 9 月にかけて、浪江町から主に福島県内に避難している人々 500 名を対象として、元のお住まいや地域の様子、元の地域への帰属感、現在のお住まい

や、現在の地域への帰属感、満足度、浪江町とのつながり、今後の動向などを尋ねた。

今回は 500 配布し 242 名の回答を得た中でいわき市在住者が 102 名を占めていたことから、いわき市在住者の心情や今後の動向をピックアップした。

2011 年福島原発災害後、20,000 人ほどいた住民うち 14,000 人は福島県内に避難した。そのうちの 20%は最終的にいわき市に避難したと言われている。避難当初はいわき市民から反発もあったようである。それは、ゴミの出し方の違いなどもあるが、やはり浪江町民は賠償金をもらって、いわき市民はもらっていないという被差別意識もあったであろう。旧浪江町民は、様々な悩みを抱え、浪江町から十分な支援を得られない中で、「なみえ絆いわき会」を結成し、自ら自分たちを支援していった。そのような自立の精神がいわき市内に住居を新築したことにも繋がっていると考えられる。

現在いわき市に居住してる方の心情としては、生活も落ち着き、家も所有し、終の棲家の場所としていわき市を考えている人が多いという結果の一方で、落ち着きはしたが、まだ帰還を迷っている人がいる事実を発見したことも純粋な驚きであった。アンケートの結果にも示されているように、元々浪江町への思いが強い人が多い。

また、大変な状況の中でも、浪江町や浪江町とのつながりを保っていた人も多い。ある人は「ふるさととは人格の一部である」と言っていたが、落ち着いてはいないが、心情的には何となく落ち着かないと思っている人が多いと考えられる。しかし、帰還という選択肢の中で一番のネックとなっているのが、住宅をすでに解体し、住む家がないということである。

自由記述を見ると、現在二本松市にいる人は、行政への不満が強く、浪江町には戻らないと言っている人が多い。その一方でいわき市に住む人は、表立って行政への不満を言う人は少なく、自立の道を歩んでいるようにも見える。いわき市の人々は、今後現実との折り合いで落ち着いていくのか、ふるさとの思いが漸ちがたいのかは、動静を見守っていきたい。

参考文献

- 1) 日本赤十字看護大学, 2017, いわき市内に避難している浪江町民の健康調査支援事業報告書